

※社会に出ることができない障がい者(星)を探し、社会参加ができるよう「磨いて」いくことがテーマ。



鉄道駅の駅長や駅員が協力し、線路沿いの清掃活動を実施。社会奉仕活動を通じた交流を、通常学校の校長も積極的に推進している

障がいを持った子どもたちにとって、家庭を出て、初めての社会参加の場となるのが学校だ。しかし、地域内の通常学校には受け

ない。障がいを持った子どもたちにとって、家庭を出て、初めての社会参加の場となるのが学校だ。しかし、地域内の通常学校には受け入れられない。障がいを持った子どもたちにとって、家庭を出て、初めての社会参加の場となるのが学校だ。しかし、地域内の通常学校には受け入れられない。

などから法律は形骸化。そこで JICA は 08 年、この行動計画を後押しすべく、北西部辺境州のアボタバード県で「障害者社会参加促進事業（通称 A STAR プロジェクト）」を開始した。

い！僕でもできるかな。「ドライパーになるには、文字も読まないといけないし、計算もできないといけないんだよ。もう一回学校に

行った。「障がいがあるのにすごい！僕でもできるかな。「ドライパーになるには、文字も読まないといけないし、計算もできないといけないんだよ。もう一回学校に

ある日、こんなことがあった。下肢不自由のため、学校に行くのをあきらめた少年を訪問したときのこと。片足義足で車を運転して来たスタッフを見て、彼はこう

言った。「障がいがあるのにすごい！僕でもできるかな。「ドライパーになるには、文字も読まないといけないし、計算もできないといけないんだよ。もう一回学校に

楽しいながら一緒に学ぼう。池田さんとプロジェクトチームがまず取り組んだのが、障がい者の自宅訪問だ。家に閉じこもり、外の世界を知らない障がい者たちが、同じく障がいを持ちながら

社会に出て生き生きと働くプロジェクトのスタッフと出合い、話をするので、心の変化を生み出したという狙いからだ。

入れ態勢が整っておらず、特殊学校の数も足りない。あったとしても、通学できない距離だったり、障がいの種類によっては受け入れられない。問題は山積している。

それでも、学校へ行きたいという子どもはたくさんいる。肢体が不自由な 100 人の子どもを対象にプロジェクトが行った調査では、6割が何の教育も受けていないことが分かっている。

孤獨な生活を強いられている。途上国の障がい者の割合は人口の約 10% といわれ、パキスタンも例外ではない。同国政府の発表では、障がい児の就学率は 4% に

満たないという（非障がい児は約 75%）。障がいがある原因で学校に行けず、将来への希望も持てない。そんな悲しい現実を背負いながらも、そこにはいつも、懸命に生きる子どもたちの姿がある。

パキスタンはアジアでも先立って、障がい者に対する取り組みを推進してきた国の一つだ。国連

が「国際障害者年」に定めた 1981 年以降、パキスタンのジャウル・ハック大統領（当時）は、障がい者の教育や雇用の法律・施設の整備などを積極的に進めた。そして 2002 年には、政府が「障害者国家政策」を策定。06 年に「国家行動計画」が定められた。しかし、縦割り行政や地方分権の遅れ



(上)6.5キロの長距離ウォークには、特殊学校の児童、医療従事者、県社会福祉局などから多くの人が参加。歩行者からも温かい声援が送られた(下)スポーツ大会で、風船を膨らませる競技に参加する子どもたち。障がい児と非障がい児が一緒になって、楽しい時間を過ごした



知的発達障がいのある子どもの家を訪問。同じ障がいを持ちながら働くスタッフ(左)を見て、刺激を受けてもらうことも目的の一つだ

障がいを乗り越え 外の世界へ羽ばたこう

社会保障制度が十分に整備されていないパキスタンでは、社会的な認識不足も相伴い、障がい者に対する差別がまだ根強く残っている。



通常学校で学ぶ肢体不自由の子ども。教職員と家族の障がいに対する理解により、この学校では地域の中でもインクルーシブ教育が進んでいる

